

「おれ」と「おまえ」の共同体

—その変貌と拡大—

小林 美恵子

1. はじめに一男性特有語としての「おれ」「おまえ」

近年の自然談話の分析では、概してことばの男女差がなくなり中性化してきたと言われるが、自称詞・対称詞については未だジェンダーの偏りがないわけではない。現代日本語研究会篇（1997・2002）における職場の自然談話調査（以下、現日（97）・（02）と示す）によれば、「おれ」「ぼく」は引用を除けば男性のみが使用、これに対置する形で「あたし」「わたくし」は女性が使っている。「おれ」「ぼく」が女子中学生などに使われているという報告はすでに寿岳（1979）でされ、その後も実際にこの語を若い女性が使うのを耳にすることはあるが、これらはある年代の女性における一過性の使用といえるだろう。寿岳に報告された中学生は既に40歳ぐらいになるはずだが、共通語話者で「おれ」「ぼく」を使用する40代女性というのは現実的ではないように思われる。

対称詞「あなた」「あんた」「きみ」については現日（97）（02）では男女ともに使用例があるが、「おまえ」はすべて男性によって用いられており、少なくとも職場における成人では男性に特有な語とみてよいだろう。なお、この場合「おれ」と「おまえ」は同一の話者において共起するが、「ぼく」と「おまえ」が共起することは、少なくともこの資料の範囲ではない。また、職場での出現数は少ないが、対者を名字で呼び捨てた例でも、共起する対称詞は「おまえ」のみで、相手を「あなた」や「きみ」で呼ぶ話者が同時に相手の名字を呼び捨てた例は引用中の1例を除き皆無である。ただし、名字を呼び捨てる呼称は現日（97）で複数女性の使用（2例）が見られ、男性特有とは言えない。

以上から、「おれ」「おまえ」はある種の「男らしい」ことば使いのマー

カー的役割を果たしていると言えそうである。ここで「ある種」としたのはすべての男性がそのようなことば遣いをするのではないこと、そのようなことば遣いをする男性もつねにそのようなことば遣いをするのではないこと、しかし通常女性はそのようなことば遣いはしないということである。

さて、それでは「おれ」「おまえ」が用いられるのはどのような男性の、どのような発話においてであろうか。

桜井(2002)は現日(02)の資料を分析し、対象となった21の職場の中には、「おれ」がいっさい現れない大学のような職場と、逆に自称のすべて、またはほとんどが「おれ」であるような職場があるとする。後者は、美容室、ミュージシャン(バンド)、デザイン事務所などで、桜井はこれを「広義の芸術性を求める職種であり、インフォーマリティを好む職場」としている。

この資料によれば「おれ」と「ぼく」や「わたし」が混在して現れる職場のうち、ある保険代理店、職業高校などで「おれ」が多く使われているが、このような職場でも「おれ」がフォーマルな会議の場で用いられることはほとんどない(2例のみ)。用いられるのは「雑談」や比較的インフォーマルな「打合わせ」などの場である。

つぎに現日(97)(02)における「おまえ」であるが、現日(97)9例、現日(02)16例、すべて前述のとおり男性によって用いられている。しかも現日(02)の「おまえ」16例のうち10例は自称でも「おれ」のみが用いられていたデザイン事務所の複数のメンバーによるものであり、3例は同じく「おれ」が多用されていた保険代理店の話者によるものである。また、現日(97)においても10例中6例があるイベント企画会社の男性社員に用いられ、この話者の自称も「おれ」である。なお、30代のこの話者が「おれ」「おまえ」を使って話している相手は4歳年下の女性の同僚である。両資料の他の「おまえ」19例すべては男性から男性への呼びかけ・言及であるから、女性に向けたこの例は特記すべき傾向を示すものと言えよう。これについては今は指摘にとどめ、後に詳述する。この例を別にすれば、互いに「おれ」と自称し「おまえ」と呼びかけるというのが現日(97)(02)の「おれ」「おまえ」の基本的な形である。次に現日(02)よりこのような談話の例を示す。

(例1 『現日(02)』 デザイン事務所昼休み 同僚A・B・C ()内は年齢)

(B31) おまえ、それいいなー<笑い>。

(A34) タン塩。

(A34) なんでもいい、おまえに<笑いながら>それやる。

(C28) それで#####<笑い>。 (##### 不明部分)

(A34) えー。<爆笑>

(B31) どうゆうことなんだ。

(A34) おれはない、どぎまぎしている。

(C28) なんだよー。

(例2 『現日(02)』 デザイン事務所 仕事打ち合わせ 同僚D・E)

(D40) そーんなおまえ、そなたくさん、自分がさー、じゅー(10)もにじゅー(20)も持っててさー、フィルムにさー、300枚も400枚もさー、たまってるわけじゃあるまいしさー、杓子定規に考えるなよー。

(D40) たとえば[取引先社名]みたいにおまえ、1か月600点あって、それをどうしますかってゆうんだったらそれは違うよー。

(E37) いやー、それはでも違う★ねー。

(D40) →とりあえずーやるから、やってから、もしそうゆう意見が出たんだったらバツクしろよー。 (★ →← は重なるの部分を示す)

例1は20代から30代、例2は30代と40代の話者の会話であるが、最年長と最年少の年齢差は例1では6歳、例2では3歳で、話者はほぼ対等な同世代と言ってよい。「おれ」「おまえ」のほかにも、動詞の言い切り「やる」「～ている」、断定の「だ」の使用、禁止「考えるな」・命令形「～しろ」の使用、これらにつけた終助詞「よ」の多用などが特徴的である。禁止・命令の他にも相手に対して「それは違う」とか「なんだよ」などと批判的な発話もあるが、これらは互いの親密性の上に成り立っていると考えられ、どの話者の待遇的なレベルも同等と言ってよいインフォーマルなやりとりである。小論では、以下、このような男性のインフォーマルな談話に用いられる「おれ」

「おまえ」およびそれらを含む談話の文体の発生・変遷・今後について、おりの小説作品や映画の台詞などを手がかりに探っていくこととする。

2. ホモソーシャルリティと自称・対称詞

「『おれ』『おまえ』の仲」といえば男どうしの非常に親しい関係である。セジウィック(1985)(1990)は同性愛を伴わない同性どうしの他者排除的な親密な関係を「ホモソーシャル」とした。四方田(2004)は、日本における旧制高校の寄宿舎、軍隊、監獄、やくざ社会などに成立する仲間意識に、このホモソーシャルな関係が体现されているとし、その視点から1950～60年代の日活アクション映画を論じた。

「おれ」「おまえ」を始めとして、「男ことば」があるとされる日本社会においてホモソーシャルな関係と言語とが深く結びついているのではないか、というのは魅力的な仮説である。この視点から、まず、四方田がホモソーシャルな関係として論じた『拳銃無頼帖』シリーズ(1960)中の2本の映画に現れる男たちの会話を検討する。このシリーズが描くのは、やくざの世界に連なる拳銃の名手である青年の物語である。シリーズ3本、それぞれの主役は別の人物であり、以下のとおり「竜」「丈二」などの名を持つが、演じているのはどの映画でも、1961年に若くして事故死した赤木圭一郎である。

(例3 『抜き打ちの竜』1960 「竜」と「コルトの銀」)

銀 おまえのおかげでボスともすっぱり手が切れた。さ、あらためて勝負だ。

竜 今までのこたあ 全部水に流せねえかい。

銀 おれはいいんだよ。だがな、このハジキが承知しねえんだ。

竜 そうか。しかし、おれあいやだ。勝手に抜け。

銀 どうしてもかい？

竜 とにかくおれはいやだ。

銀 外は火の海だ。人が来る前におれか、おまえか、勝ったほうが姿を消す。

竜 麻薬官の石井さんに連絡した。たとえおまえが勝っても、そういつまでも逃げられるもんじゃねえ。

(例4 『電光石火の男』1960 「丈二」と「大津刑事」)

- 大津 まあ、かけろよ。どうしても一度話し合わなくてはいけなくなったよ。
- 丈二 もう話し合ったって無駄さ。
- 大津 そんなこたあない。ほかあ圭子さんとの話、解消したよ。
- 丈二 えっ。 誤解しないでくれ。おれは確かに圭さんと・・しかし、
- 大津 彼女の申し出断ったんだろ。聞いたよ。しかし、それでぼくは本当のことがわかった。やっぱりきみはほんとうに圭さんを愛しているんだよ。自分をいつわるのはよしたほうがいい。
- 丈二 昇さん、ほんとうのことを言おう。
- 大津 ああ、言ってくれ。
- 丈二 おれはね、あんたを殺しにきた。しかし、もう一つ、ほんとはどうして助けようかと・・・

例3の竜と銀はももとは敵対するライバルだったが、抗争の中で結束感というか、ある種の友情を抱くに至ったと設定されている。「おれ」「おまえ」を用い、命令形も含め断定的な言い切りをし、終助詞「よ」も用いない。「ない」を「ねえ」、「ことは」を「こたあ」のように伸ばす言い方などもあり、特有のくだけた「男ことば」と言える。例4では大津は丈二の高校・柔道部の先輩であり、二人は非常に親しかったが今は立場が変わっている。丈二が刑務所に入っている間に彼の恋人圭子と大津は婚約するが、丈二の出所後圭子は自分が愛しているのはやはり彼なのだと気づき、大津に婚約の解消を申し出る。

大津は学校出の刑事と設定されているためか「だよ」「したよ」のような終助詞「よ」のついた言い切りが多い。この「よ」は現日(02)では多出したが、『拳銃無頼帖』のやくざたちにはほとんど用いられない(但し日本人俳優が演ずる中国人やくざの日本語には頻出する)。丈二にはこの言い方はないし、基本的には文末は断定言い切りだが、命令形でなく「～てくれ」のような依頼形を使うなど語調はやや柔らかい。なによりも例4では、大津は「ぼく」「きみ」、丈二は「おれ」は使うが相手への呼びかけは「あんた」「昇

(のぼる)さん」などで、自称・対称に関しては「おれ」「おまえ」の世界とは言えない。

3. 明治期～戦中の男性相互の呼称

このようなホモソーシャルな関係を描いた小説や映画はほかにも多いと思われる。以下、四方田があげた旧制高校(書生)、軍隊などを中心に、明治期以後のホモソーシャルな関係を描いたと言えそうな例の台詞を検討する。

これらの例は前節の映画の台詞も含め、言うまでもなく作られた台詞であり、実際の談話そのままを写し出すものではないが、自然談話の入手が難しいこと、当時の人々が自然に受け入れることができた、という意味においてある程度は現実を反映し、当時の言語を探る一つの手がかりとはなるものと考えられる。なお、表記については、基本的に参照した文献のものに倣った。

(例5 『ころ』1914 夏目漱石 「先生」と「私」)

先生 突然だが、君の家(うち)には財産が余程(よっぽど)あるんですか。

私 あるという程ありやしません。

先生 まあどの位あるのかね。失礼の様だが

私 どの位って、山と田地が少しあるぎりで、金なんかまるでないでしょう。先生はどうなんです。どの位の財産を有(も)っていらっしゃるんですか。

先生 私は財産家と見えますか。

私 そうでしょう。

先生 そりゃ、その位の金はあるさ。けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもっと大きな家でも造るさ。これでももとは財産家なんだがなあ。これでももとは財産家なんですよ、君。

あなたの御父さんの病気はその後どうなりました。

.....

先生 そら見給え。

私 何をですか。

先生 君の気分だって、私の返事一つですぐ変わるじゃないか。

ホモソーシャルな関係というより、むしろホモセクシュアルな関係を描いていると言われることもある「先生」と「私」（鎌倉で先生に会い惹かれる若い書生）だが、二人の年齢が離れていること、「私」が相手を「先生」と呼んで高く遇していることにもよるからか、「先生」のことばは今までにあげてきた男性どうしの対話のことばと違い、一部常体が混じるものの「です・ます」を基調とする大変丁寧なものである。自称は「わたし」、対称は「君」「あなた」。書生の自称も「わたし」である。ちなみに「先生」は妻に対しては「おれ」「おまえ」を用い、文末は常体である。これについても後で触れることにする。

(例6 『三四郎』1908 夏目漱石 「三四郎」と「与次郎」)

三四郎 先生は新聞を読んだんだろうか

与次郎 家（うち）に来る新聞にゃない。だから僕も知らなかった。しかし先生は学校へ行って色々な新聞を見るからね。よし先生が見なくても誰かが話すだろう。

三四郎 すると、もう知ってるな。

与次郎 無論知ってるだろう。

三四郎 君には何ともいわないか。

与次郎 いわない。

.....

与次郎 たまに慰めようと思って、少し奔走すると、こんな事になるし。君も先生の所へ行って遣れ。

三四郎 行って遣るどころじゃない。僕にも多少責任があるから、謝罪って来る。

与次郎 君は謝罪の必要はない。

三四郎 じゃ弁解して来る。

『こころ』と比較的近い時期、同じ漱石によって書かれた、こちらはほぼ対等とっていい学生どうしの対話である。自称・対称は「僕」「君」、文末はインフォーマルな常体で、これは以下にあげる「書生ことば」の影響を受け、踏襲したことば遣いと言えよう。

(例7 『当世書生気質』1885 坪内逍遙 書生「須河」と「小町田」)

小町田 オヤ誰かと思つたら須河か。尚(まだ)君は残つてゐるのか。

須河 オイ小町田怪しいぞ。あの芸妓を君は知つちよるのか。

小町田 なアに僕が知つてるもんか。

須河 それでもえらい久しい間、君と談話(はなし)をしちよつたではないか。

小町田 エ、あれはなにサ、お客と鬼ごっこかなにかをしていて、誤つて僕に衝突たつたので、それで僕にわびてゐたのさ。

須河 さうかア。それにしては大層ていねいだなア。

小町田 何が。

須河 彼がしばしば君のほうを振りかえつて見ちよつたからサ。よッぽど君を愛(ラブ)してゐるぞ。

この「須河」のことばについて作者・坪内逍遙は「こは何処の方言と定まりたるものにあらず。書生社会に行わるる駁雑なる転訛方語(なまりことば)と思ふべし」という注をつけている。

このようなことば遣いは次の『友情』などにも踏襲され、さらに1940年代のラジオドラマにも受け継がれている。これらの話者は社会人であり、彼らのことばには学生時代のことばの影響があるしても、学生ことばとは言えない。

(例8 『友情』1920 武者小路実篤 「野島」と友人「大宮」)

野島 あれは彼女に違いない。

大宮 あれがそうなら君は仕合せものだ。

野島 あんまり恋しすぎると云うことは弱点だ。なんだか独立性がなくなったようで、魂を何かにあずけているような不安を感じる。僕は恋をしていない君をむしろ羨ましく思う。

大宮 それは本音かね。僕はそんなにまで一人を愛することが出来る君を羨ましく思うよ。

(例9 『芦溝橋』1942ラジオドラマ 「本橋啓二」と友人「平野義夫」)

本橋 一ところで、お母さんからはたよりがあるかい。

平野 ああ、ちよい／＼――。

本橋 僕も時々いただく。実はお母さんからのお手紙で、君の部隊もわかっていたから、ほんとうによく訪ねてきてくれたね。

平野 わざ／＼訪ねてきたのじゃないが、今朝急にこちらへ交代命令が出たものだからね。それで到着するとすぐ事務引継をやって申告を終ったから、何を措いてもとおもって、顔をだしたんだ。

本橋 ほう、ここの警備に交代してくれたのか。それはありがたい。じゃしばらくは、昔のように毎日顔を見られるというわけだね。

平野 つぎの命令がくるまではね。

本橋 それはすばらしいぞ。戦場で、たとえ二晩でも三日でも、君といっしょに生活できようとは、夢にもかながえないことだった。さっそく、お母さんのところへおしらせしよう。

平野 母もさぞよろこぶことだろうなあ、或は僕達以上かもしれないよ。

例3から例9を見ると、『こころ』のような例を除いては、『拳銃無頼帖』のやくざの例も含め、文末のインフォーマルな常体が相互に使われる点などにホモソーシャルな関係の言語への反映が見られるようだが、この関係で「おれ」「おまえ」が必ず用いられるとは言えない。セジウィック・四方田によれば年齢や社会的立場の上下を越えたホモソーシャルな関係というのももちろん存在するわけだが、自称詞・対称詞の使用はじめ日本語においては、このような結束よりも、社会的立場・年齢の上下などが優先して反映するようで、前節の仮説は成り立たないことがわかった。

日本語において自称詞・対称詞は可動・流動的な面を強く持つ。すなわち一人の人間が相手によって使い分けることもあり、また時代に伴い新しい自称詞・対称詞が生まれたり、特に対称詞では待遇価値が下がって使われなくなるものがあったり、よく使われる語が変わっていくということは周知の通りである。たとえば、以下、例10のように軍隊では同等以下の相手に対して

は「貴様」が用いられた。

(例10『戦塵挿話』1937ラジオドラマ 刑務所帰りの「片山」と戦友「手島」)

片山 うん、俺は親もなし家もない人間で、棄子だよ。上野の寛永寺の前に棄ててあったということだ。それから養育院で育てて貰ったが、何時の間にか飛び出して掻払いをやったりすりをやったりとう／＼少年刑務所にぶちこまれた。ここへはいつでも余り性根は直らなかったが、満期になって釈放されて、今度はホゴ会に連れて行かれた。ホゴ会じゃ俺を真人間にしようと色々骨折って呉れたが、お前のいう通り、一度悪い事をした者には、世間が冷たいよ。どうせ籍もない人間の屑だと思ふと遂自棄になって、ホゴ会にも迷惑をかけたが、ホゴ会の主任さんが心配をして俺に籍を入れて呉れたら、不思議に気持が落ち着いたよ。その中に徴兵検査さ。無事合格して満洲独立守備隊に入営させて貰った時にゃ俺は生れて始めて人並みに扱って貰った嬉しさで泣いたぜ。俺は生れ更った。俺はその時思ったね、世間が冷たいんじゃない、俺がひねくれていたんだとね。そう悟ったら世の中が愉快でならない。だから平気で昔の話をする。俺の黥八等にはこれだけの過去がある。どうだ、それでも貴様は俺を差別待遇するか。

手島 いや俺はせん。俺の知ってるのに、君のようなのがいるから。

片山 友達か。

手島 うん、まあ友達だ。

片山 貴様、前科者を友達として付合っているのか。有難いな。礼をいうぜ。

「手島」も「片山」も自称は「俺」で、戦前の親しい男性間の例には見られなかったものである。対称は「手島」は「君」だが、「片山」のほうは、「手島」を「お前」または「貴様」と呼ぶ。「片山」には終助詞「ぜ」の使用などもあり、学生出身ではない男の特徴を表していると言えよう。いずれにせよ、これらは例3から例9までには見られない特徴である。

4. 親しさを表す「おれ」「おまえ」の発生と定着

以上の例から、明治期から戦中までは親しい対等の男性どうしの関係で「お

れ」「おまえ」が用いられることはむしろ少ないということがわかった。しかし、現日(97)(02)に見るとおり、現代では親しい相手を「きみ」と呼ぶよりは「おまえ」と呼ぶことのほうがずっと多いし、TVドラマなどでも相手が男性である、女性であるにかかわらず「おれ」と自称し「おまえ」と呼びかける男性の話者は目立つ。このような「おれ」「おまえ」の用いられかたは、いつごろどういう人々のことばから始まり、どのように一般化していったのだろうか。

例9および例10に取り上げたラジオドラマデータを所収する資料『戦時中の話しことば』（遠藤織枝ほか・2004 以下「ラジオ(04)」と称す）には1936年から1955年までに放送されたラジオドラマ78本の文字化資料（文単位のレコード数37683）が含まれる。この中に現れる男性話者の「おまえ」使用例は282だが、その中で対等な相手に向かって発せられた例は戦友に対する2例のみである（その1例は例10に含まれている）。女性の発話例も90例あるが、これらも含め、いずれも親から子、兄姉から弟妹、あるいは年長者から若い者、主人から使用人のように上位者から下位者に用いられたもので、その中にはもちろん夫から妻への例も含まれる。「貴様」については41例あるが、戦友に対するものは9例、他は上官から部下、あるいは軍人から女性を含む民間人に対して用いられている。これ以外の友人など対等と考えられる相手に対しては男性は「きみ」を用いることが多く、「あなた」については引用的に用いられた3例および、外国を舞台に外国人が登場するドラマの5例のみである。ちなみにこの資料のうち標準語話者の日本人を描く現代劇（もちろん当時の）は31本である。したがって、この時期までは一般的に男性が親しい対等な相手に用いる対称詞は「きみ」が主流であり「おまえ」は上位者から下位者に対する語であったと言ってよいだろう。もちろんラジオドラマの台詞は作られたものであり、自然談話そのままではない。ことに話者の顔が見えないわけだから、自称・対称詞などは普通の談話よりは多用されていると考えられる。それを考えに入れても、対等な相手に対する「おまえ」の使用頻度は少なかったと言えよう。

いっぽう、「おれ」であるが、男性の使用例329のうち戦友に向かって発せ

られたものが33例、友人4・親友2、その他同志・同僚・団員仲間などに向かって言われたものが25例あった。それに対して「ぼく」は929、うち友人に対してが185、親友19である。この語はドラマの時代を問わず、話し手と聞き手の上下・親疎関係を問わず使われているが、戦友に対して用いられた例は皆無であった。

つまり、この時代までは親しい同等な男性どうしの関係では自称「ぼく」、対称「きみ」を用いて話すのがもっとも一般的であったが、戦友どうしでは「おれ」「貴様」、そして、時に「おまえ」が使われた、ということになる。

このような状況に戦後、変化が見られる。以下は、戦後石原慎太郎の原作により作られた映画『太陽の季節』中、学生たちが街に繰り出し、女性を“ナンパ”しようとするときの気の置けない会話である。

(例11 『太陽の季節』1956 学生C「津川」と友人たちA・B)

学生A あれに決めた。あれ捕まえなきゃ、今夜おめえたち酒飲まさねえからな。

学生B たっちゃん、おまえのほうが二つだけ数がすくないんだからさ、先に行ってくれよ。頼むよー。

学生C よし、それじゃ後ろにいてくれよ。じゃなきゃおれだって、やだよ。

学生B オッケー。

学生C あの一、もしもし、ちょっと失礼なんですが。

女性 为什么呢かしら。

学生C あの一、ぼくたちT(ティー)学園のスポー、いや拳闘部の津川って言うんです。

女性 まあ、拳闘？

この映画では原作者石原慎太郎の弟、裕次郎が、最初「若者言葉のダイアログ監修」を頼まれ、それがきっかけとなってスクリーンデビューすることになったそうだ。つまり、製作者は「自然なことば」への意識をある程度持っていたということである。学生たちは友人どうしでは「おれ」「おまえ」と呼び合い、それ以前、戦争中までの学生とは違って「じゃなきゃ」のよう

な縮約形や「おめえ」「飲まさねえ」などの「べらんめ一口調」も混じったきわめてくれた常体文末でしゃべる。ただし、初対面の女性への話しかけではそれが一変していることもわかる。

このような語り口は、たとえば加山雄三が演じた『若大将シリーズ』の学生の会話(例12)や、現代に至る以下のような例(例13・14)にも共通する。

(例12 『ハワイの若大将』1963 若大将「若」と大学の友人青大将「青」)

青 なつかしいな、若大将。

若 気持ち悪い奴だなあ、おまえにそんな顔されるとろくなことねえからなあ。ところで、なんだい？

青 おれ、つらいんだよ。

若 つらいつて仕事か？

青 いや、違うんだよ。おれ息が詰まりそうなんだな。飯もろくに喉に通らねえんだよ。

若 そりゃ、大変だ。病院行ったのか？

青 いや違うんだよ、全然。実はスミちゃんのことなんだよ。おれスミちゃんがめっちゃくちゃ好きになっちゃったんだよ。

若 で、彼女に言ったのか。

青 それなんだよなあ、おれ毎朝彼女の前に顔出すんだけどさ、会うと与太しか言えなくなっちゃうんだよ。だから田沼、頼むから頼まれてくれ。

若 何を。

青 な、おまえ、スミちゃんに信用がある。だからおれの気持ちを彼女に伝えて(そ)していい返事もらってくれねえか。

(例13 『帰らざる日々』1978 1972年の高校の同級生「黒岩」と「野崎」)

黒岩 ま、入れよ。

野崎 なんだってあんな小細工したんだ。

黒岩 迷惑だっているのか。まんざらでもなかったくせに。ばかたれが。

野崎 おまえの魂胆がわからんよ。

黒岩 おれはな、ふたりとも好きなんよ。マキも、おまえも。

(例14『スクラップ・ヘブン』2005 自由な男「テツ」と警官「シンゴ」)

テツ おれたちのやってきたことは単なる遊びじゃないんだよ。ホームレスが銃を持ってるかもしれないと思えば、どんな馬鹿なガキでも振り上げた棒を投げ捨てるんだよ。

シン やりすぎなんだよ。

テツ 世の中痛みを想像できないバカばっかなんだよ。シンゴ忘れたのか。おまえが言い出したことだ。

シン おまえ、最初からおれが警察官だからおれを誘ったのか。はじめからおまえ、そのつもりで誘ったんだな。

テツ 違う。あのバスであいつに撃たれたとき思った。

これらの例では、時代や設定によって多少の差はあるものの、「おれ」「おまえ」がごく当たり前に使われ、「なっちゃん」「わからんよ」「持ってる」「バカばっか」などの縮約形や「ない」を「ねー」などと言う音の変化などが現れているものもある。これらは戦前から戦時中までの学生（知識階層）の会話にはほとんど見られなかった特徴である。戦争中、軍人・兵隊に用いられた「おれ」が一般人にも定着し、「貴様」は定着しなかったが、かわりに戦前までは上位者から下位者への呼びかけとして「おれ」とともに用いられることが多かった「おまえ」が定着していったのだろう。これはまた、戦後の学生が特殊なエリート層でなく大衆化していったこと、マスコミの発達などによって言語についても階層による差異が小さくなっていった様相を示している。すなわち、大衆の大半が「学生出身者」となり、「刑務所帰りのもとやくざ」のような人々も「学生出身者」もことばにおいては大きな差がないという現象がおこったのだと考えられる。

5. 上位者から下位者への「おれ」「おまえ」

ところで、言うまでもなく、明治期から戦後にいたるまで女性話者も含め上位者から下位者に向けて用いられる「おまえ」およびそれと対になる形で

共通語男性話者が用いる「おれ」は存在し続けたのである。『こころ』には「私」（書生）と両親の間で次のようなやりとりがある。（地の文を省略し会話文のみを記す）

（例15 『こころ』 1914 「私」と「父」「母」）

父 その先生は何をしているのかい。

私 何もしていないんです。

父 何もしていないと云うのは、またどういう訳かね。御前がそれ程尊敬する位な人なら何か遣っていそうなものだがね。おれのような人間だって、月給こそ貰っちゃいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない。

母 御前のいう様な偉い方なら、きっと何か口を探して下さるよ。頼んでご覧なのかい。

.....

私（母に）先生に手紙を書きましたよ。あなたの仰しゃった通り。一寸読んでご覧なさい。

.....

私（父に）此所にこうしていたって、あなたの仰しゃる通りの地位が得られるものじゃないですから。

「父」は息子に「俺」「御前」を用い常体言い切り。母も「御前」と呼びかけ常体に終助詞がついた形で話す。これに対して息子は両親に敬体をもって遇している。息子が両親に「あなた」と呼びかけているのは現在の眼から見ると違和感がないでもない（ごく最近には親を「あんた」などと呼ぶ子供もいるようなので「違和感がない」とは言い切れない）が、明治期における「あなた」の待遇的価値は現在よりは高かったのである。また『こころ』には先述のとおり「先生」から「奥さん」（妻）への次のような語りかけも見られる。

（例16 『こころ』 1914 「先生」と妻「静」）

先生 静、御前はおれより先へ死ぬだろうかね。

静 何故。

先生 何故でもない。ただ聞いて見るのさ。それとも己（おれ）の方が御前より前に

片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前のようになってるね。

静　　そう極った訳でもないわ。けれども男の方（ほう）はどうしても、そら年が上でしょう。

先生　だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己も御前より先にあの世へ行かなかつちやならない事になるね。

静　　あなたは特別よ。

先生　そうかね。

静　　だって丈夫なんですもの。殆ど煩った例（ためし）がないじゃありませんか。そりやどうしたって私の方が先だわ。

「先生」の自称は「己（おれ）」対称は「御前」文末は「ね」「さ」などの終助詞を用い、穏やかで柔らかいのが基本的には常体言い切りである。これに対して妻の「静」は「私」「あなた」を用い「でしょう」「じゃありませんか」など敬体の文末もあり、「先生」よりは一段丁寧なことば遣いと言ってよい。「だわ」「特別よ」「ですもの」などの女性特有とされる語尾、いわゆる「てよだわ言葉」も用いられる。彼女は明治の新しい女学生出身者なのである。

このような親子、夫婦間の会話はラジオ(04)にも現れるし、戦後のドラマ・映画・小説などにも現れる。殊に子から親に対する「あなた」や母親から子供に対する「おまえ」などは現在ではほとんど用いられないと考えられるが、父親がある程度成人した（幼児期を過ぎた）子供に「おれ」「おまえ」で語ること、男性が妻や恋人に対して「おれ」「おまえ」で語ることは現在でも行われている。しかもこのような会話では少なくともある時期までは、例にもあるとおり男性の常体に対して妻や子は敬体で答えるというのが普通であった。

寿岳(1979)では、このような、特に夫婦間での「おまえ」について「強者の、少し大仰に言えば、一種のヒエラルキーを獲得している者が下の者に声をかけるときのことばであるだけに、うまく行けば、立派な殿様が良民にあたたかい目差しを注ぐような、穏やかな雰囲気溢れた夫婦の状況をあら

わすことばとなり得る」として「肯定されて然るべき」としたうえで「どちらが上・下ということなく、互いが互いを見つめあう、いわば夫についてゆく型を脱して各自が精一杯自己の命を燃焼するタイプであり、友情型」の夫婦として「『お前』を乗り越える」ことを提唱している。

小林(1992)では、男性が女性を「おまえ」と呼ぶ若い夫婦や恋人どうしの存在が気になったことから、17組の夫婦に互いの呼称についてインタビューした。このとき夫が妻を「おまえ」と呼ぶことがあると答えた夫婦は3組にすぎなかったが、ある妻は「親しみの表現として受け取っている。下に見られているとは思わない」と答え、いっぽう妻を決して「おまえ」とは呼ばないと答えた別の夫婦はそれぞれ「そんな呼び方はされたくない」「妻にそんなことを言ったら偉そうにするなど殺されてしまう(笑)」などと答えた。「おまえ」と呼ぶ夫も、呼ばない夫も妻より自分が上だと考え支配しようなどと思っているのではないかもしれない。しかし「おまえ」を使うか使わないかは、この語を単なる親しみの表象と感じるか、上位者から下位者への尊大な呼びかけと感じるかの差と思われた。このとき、ある妻(言語学者)は「自分たち夫婦は夫が私を『おまえ』と呼ぶが、私も夫に対して『おまえ』と言うからまったく問題は感じない」と答えたが、これは当時としてはきわめて例外的な答えであった。

親しい男性どうしの用いる「おれ」「おまえ」は相互的に用いられる。しかし、男性と女性の間においては、「おれ」はもちろん「おまえ」も、少なくともこの時期には相互的に用いることができることばではなかった。上位者の意識において親しみの表象として用いられたとしても、「おまえ」と呼ばれて「おまえ」とは返せず、命令形を用いる相手に自分は命令できないとするならば、その関係が真に親しく対等であるということはいえないうだろう。だからこそ、この語で呼ばない夫や呼ばれたくない妻は、この語のうちに上位者から下位者への支配意識を感じ取り、夫婦関係にそれを反映させることを恐れたのである。

6. まとめ—現代の男女間の「おれ」「おまえ」

現日(97)における男性から女性に向けられた「おまえ」を含む発話とそれに対する女性の反応は以下のようなものである。

(例17 『現日(97)』 イベント企画会社同僚 男32歳 女28歳)

男 おまえってそういう奴なんだよ。

女 そうなのかな↑そういうのが好きなんだよ、やっぱり。

男 でしょう、わかってる。

女 うん。

男 それだと、(うん (inf女) なんにもさ、進まないわけじゃん###)。

女 え、いいじゃない、別にそんな無理やり進めなかったってさ。

男 え。

女 成すがまま。え↑

男 おっまえ。

女 なにが↑

男 なんでもない。

女 なに↑ [名前] ちゃん↑、いまの。うっへへへ。<笑い>

男 おまえ、絶対に誤解してるよ。

女 そう↑

男 絶対に。

女 や、いやあ、でもね、でも、違う違う違う、だから、そっち、そっち方向の矢は誤解してるかもしれないけれど、[名前] ちゃんから出てる矢はね、わたしは絶対にね、間違っていないと思う。

男性は女性を「おまえ」と呼び、女性は「名前+ちゃん」と相手と呼ぶ。文末も基本的には男女ともに常体であり、むしろ男性のほうに「でしょう」と敬体の文末が見られる。自称はそれぞれ、「おれ」「わたし」と異なるが、自称・対称以外は男女のことばの差は、終助詞「ね」の使用の差が多少見られる程度で、ほとんどないといってよいだろう。この男性は多分上位者の支

配的な意図をもって下位の女性を「おまえ」と呼んでいるのではなく、男性の友人を呼ぶのと同じようなつもりなのだろうし、女性のほうも下に遇されたと考えている返答とは言えない。

さらに小林(2005)では次のようなTVドラマの例を報告した。

(例18 『ヤンキー母校に帰る』2003 HR T…教師 F・f…女子生徒)

T おいてめえら、ゆっとくけどな、走るからにはおめえ、ぜってえ優勝しろよ、こりゃー。

F てめえにはっぱかけられる筋合いじゃねえよ。

f だいたい、マラソンなんかで優勝してなんのとくがあるつつうんだよ。

T 達成感とか満足感とかいくらでもあるじゃねえか。

(例19 『ヤンキー母校に帰る』2003 個人面談 T…教師 K…女子生徒)

T 今までのおまえは*岩崎にC組っていう居場所を与えてもらっていた。でもさ、これからはクミコが自分で居場所をさがさなきゃ、作っていかなきゃ。大丈夫だから、おまえだったらできるよ。一緒に走ろう。あしたみんなと一緒に走ろうよ。おれも走るから。今までみたいにあいつらのけつをくつついて歩くんじゃない。あしたはさ、おまえがあいつらをひっぱってやれよ。それがクミコにできることだろ。あいつらにしてあげられることだろ。勇気出せよ、作田クミコ。

(*岩崎=生徒の元担任教師の名)

K みんなと、みんなと一緒に走りたいです。

T よし。

例18および19の若い男性教師は同一人物である。彼は生徒に対しては常に「おれ」「おまえ」を用い、インフォーマルな口調でしゃべる。これは教師ゆえ上位者として下位者に対していると見ることも可能だが、むしろ親しみの表象としての口調と見るべきだろう。例19の生徒は教師への一定の距離や服従を示して「です」調で返事をするが、この生徒への彼の口調は命令形であっても命令するというよりは誘導し、共感を喚起するものである。いっぽう

の例18においては答える生徒の調子にあわせるかのようにぞんざいな調子であり、対称も「おまえ」でなく「おめえ」としている。また、これに答える生徒もまったく同じように教師を「てめえ」呼ばわりしてぞんざいな口調であり、両者はそこに一種の対等・親密な関係を作っていると言える。

これらの例は作られたドラマの台詞であり現実とは乖離していると考えられる向きもあるかもしれない。生徒が例18のようなことば遣いをしないよう指導・矯正をするのが教育という側面もあるから、実際にここまでの対等・インフォーマルな会話を教師と女子生徒がすることはないかもしれない。しかし、現実には教師を「おまえ」（おめえ）・「てめえ」と呼んで憚らない生徒、男子を「おまえ」と呼ぶ女子は確実に存在する。中・高校生の場合、「おれ」「ぼく」を教師にも自称する女子生徒も現実に存在するし、特に若い人々の間では男性だけでなく女性が、男女にかかわらず友人を「名字呼び捨て」にするという、昔はあまり見られなかった現象も一般化している。このように見てくると、「おれ」と自称し「おまえ」と呼ぶということが尊大で野卑な、上位者から下位者への遇しかたであるとは、言う者はもちろん言われる側も思ってもいないのだろう。「おれ」はともかくとして、少なくとも「おまえ」や、それとともに使われる男女差がないというよりむしろ従来「男ことば」とされたインフォーマルな文体が、単に親しい者どうしの親密な意識の表現として、男性間のみならず、男女間、また女性どうしにも広がっていく可能性はすでに存在するのではないかと考えられる。「おれ」と「おまえ」の形作ってきた男性のみが属する共同体は今やジェンダーを越えて変容しつつあるのではないか。それはかつて、「おれ」「おまえ」が「ぼく」「きみ」に代わって知識階層を含む男性一般の親しさを表す語として広まったことを、男女間で繰り返していると見ることもできる。そして、この現象を支えているのは小さくなった男女間のことばの差であることは論をまたないだろう。

参考文献

- 遠藤織枝ほか(2004)『戦時中の話しことば ラジオドラマ台本から』 ひつじ書房
現代日本語研究会(1997)『女性のことば・職場編』 ひつじ書房

- 現代日本語研究会(2002)『男性のことば・職場編』 ひつじ書房
- 小林美恵子(1992)「好きだから『おまえ』なんて一パートナーの呼び方」(『女性の呼び方
大研究 ギャルからオバさんまで』遠藤織枝編 三省堂)
- 小林美恵子(2005)「男の命令・女の命令」(『ことば』26号 現代日本語研究会)
- 桜井隆(2002)「『おれ』と『ぼく』」(『男性のことば・職場編』所収)
- 寿岳章子(1979)『日本語と女』岩波新書
- セジウィック(1990)『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀』青土社 (1999)
- セジウィック(1985)『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出
版会 (2001)
- 四方田大彦・斉藤綾子(2004)『男たちの絆、アジア映画 ホモソーシャルな欲望』平凡社

引用資料

- 小説『当世書生気質』(1885)坪内逍遙 岩波文庫版
- 小説『三四郎』(1908)夏目漱石 岩波文庫版
- 小説『こころ』(1914)夏目漱石 新潮文庫版
- 小説『友情』(1920)武者小路実篤 岩波文庫版
- 物語『戦塵挿話』(1937)小林勝(『戦時中の話しことば ラジオドラマ台本から』所収)
- 放送劇『芦溝橋』(1942)大隈俊雄(『戦時中の話しことば ラジオドラマ台本から』所収)
- 映画『太陽の季節』(1956)監督：古川卓巳 日活
- 映画『抜き打ちの竜』(1960)監督：野口博志 日活
- 映画『電光石火の男』(1960)監督：野口博志 日活
- 映画『ハワイの若大将』(1963)監督：福田純 東宝
- 映画『帰らざる日々』(1978)監督：藤田敏八 日活
- 映画『スクラップ・ヘブン』(2005)監督：李相日 オフィスシロウズ=シネカノン
- テレビドラマ『ヤンキー母校に帰る』(2003)飯野陽子 いずみ吉紘 TBS

(こばやし みえこ)